

“Childe Roland To The Dark Tower Came”
における蟻地獄的「渦巻き構造」

吉 門 牧 雄

(人文学部英文研究室)

The Spiral Structure in “Childe
Roland To The Dark Tower Came”

Makio YOSHIKADO

(Department of English)

Abstract: Robert Browning's “Childe Roland To The Dark Tower Came” is indeed an enigmatic poem. Though Roland's destination, the Dark Tower was attained at last, his genuine purpose in the quest still remains obscure. In addition, it is hardly easy to decide whether his quest is success or failure, because in spite of his final success in reaching the Dark Tower, at the same time he was entrapped in the den in the middle of which the Tower lay. Also, I think that there has been yet no satisfactory solution of the meaning of the Tower itself. My main focus is then to make clear these points from the viewpoint of the spiral structure in this poem.

This spiral structure can be applied to the space, not to the time, of the poem, because there can scarcely be seen a lapse of time from the beginning to the end. With regard to the space, however, it is obvious that it has a spiral structure which gradually becomes narrower and more desolate towards its center, the Dark Tower. Since Roland, at any rate, enters into such a spiral structure and with much difficulty achieves his end of catching sight of the Tower, in that respect it might be regarded as success. Nevertheless, I cannot praise his seeming success so simply, because that “round squat turret, blind as the fool's heart” (1.182) does not seem to be a worthy tower of his lifelong quest. In fact, no reward for his arrival at the Tower is bestowed upon him after all, and what is worse, Roland falls in a trap without any hope of getting out of it. Taking these things into consideration, I cannot help feeling doubtful of the genuineness of his success. To clarify this point, then, it is necessary to make a research into the state of his mind in the quest.

When he encountered the hoary cripple, he had already been in utter despair because of his drawn-out quest. Accordingly, it seems to him the best fruit to fail as his predecessors did. In such a desperate mood, he felt himself a victim of some ominous power, by which he was caught up in the spiral structure and driven into the trap. This power is indeed the power of death. In this poem, the Tower is not the symbol of death itself; rather, it simply acts as so-called a point of destruction of the

self preceding his final death which is considered to await him beyond the sphere of the poem. In the dark den, Roland is now fated to die alone as a prey to death.

It is made clear, from the above analyses, that Roland's quest is nothing but an apparent failure. In spite of that, Roland dauntlessly sets his trumpet to his lips and blows it, crying "Childe Roland to the Dark Tower came" (1.204). This is the voluntary action of accepting his own failure; but, paradoxically enough, through the very blowing and crying, he himself is saved from the mood of despair that has so far been prevailing through the poem. Besides, since the act of blowing the trumpet itself is a symbol of the resurrection of the dead at the time of the Last Judgement, this poem ends with some existential and eschatological hope.

Robert Browning の "Childe Roland To The Dark Tower Came" (以下「チャイルド・ローランド」) は確かに 'enigmatic' な詩である。¹ ローランドという "a young noble awaiting knighthood" (OED) が「暗黒の塔」("The Dark Tower") を目差して、陰惨たる荒野を通り遂にその塔を発見したというのがこの詩の筋骨きだが、いったい何の目的で「暗黒の塔」にやって来たのかが釈然としなない。また、彼の探求が成功だったのか、失敗だったのかも曖昧である。なるほど塔に辿り着いたという点では成功と言えるだろうが、その時既にローランドは罫に掛かり穴から出られない状態になっていたのである。さらに、彼が生涯かけて捜し求めた「暗黒の塔」なるものはそもそも何であるのか、という点も問題である。これらの問題は今までにも数多く論じられて来たが、本稿ではこの詩の「渦巻き構造」に焦点を当てて考察してみたいと思う。

Isobel Armstrong は「チャイルド・ローランド」のイメージについて、"The imagery is all circular, even though it may look superficially as though some progress has been made..." と指摘している。² 確かにローランドの探求は同じ所をぐるぐると回る円環的な動きのように見えるがただ闇雲に動いている訳ではない。そこにはやはり「暗黒の塔」という中心点が存在し、そこを目差しているのであるから、この詩の構造は単に円環的というより、円環的な動きを繰り返しつつも徐々に中心点に近づいていく「渦巻き構造」として捕えた方が良いのではないかと思う。

だが、これについて述べる前に一つ確認して置かねばならぬことがある。それは「渦巻き構造」が適用できるのは、空間に対してであって、時間に対してではないことだ。つまり、この詩は太陽が沈みかけて薄暗くなったころ (st. 8) 始まって、暮れゆく夕日が最後の光を発するころ (st. 32) に終わっているのであるから、冒頭から結末部分に至るまでほとんど時間の経過が見られない。

これに対し、空間の構造は非常に充実した「渦巻き」を形成している。まず詩全体を三つの部分に分けて「渦巻き構造」の輪郭を描いてみよう。第1の部分は冒頭から第8連までで、ローランドが "That hoary cripple" (1. 2) に出会った場所である。そこはローランドによって、"the dusty thoroughfare" (1. 12), "highway" (1. 44), "the safe road" (1. 52) などと表現されている。その安全な大通りから、彼は跛の指示に従い "that ominous tract" (1. 14) に属する平原の "the path" (1. 45) に入っていく。なるほど周囲には見渡す限り炭色の平原が広がっているのだが、彼の踏み出した道は大通りから小道に変わっている。

この平原の部分が第2部であり、第9連から第27連まで続く。ここでローランドは "starved ignoble nature" (1. 56) の中を進んで行くのであるが、突然小川が現われる。彼は恐怖におののきつつこの川を渡り、やっこのことで対岸に着いた。そこには泥の水たまりがあり、さらに切り株だらけの土地や沼地などを越えていった。

すると、辺りの平原が何時の間にか山々に変わっていたことに気付く。この第28連に至ってロー

ランドの行手は山々に阻まれ、彼はこれ以上進めなくなる。もうだめだと思ひ諦めようとしたまさにその瞬間、罌が落ちるような音がして、穴の中に閉じ込められてしまった。だが、その場所の真中に「暗黒の塔」が姿を見せたのである。この谷間の部分が第3部である。

このように「チャイルド・ローランド」の空間構造を分析してみると、その空間がだんだんと狭く、また険しくなっていくことが解る。言い換えれば、この詩の空間的イメージは中心点である「暗黒の塔」へと螺旋を描いて収斂していく、一つの巨大な渦巻きなのである。千田稔は『うず巻きは語る』の中で、渦巻きという図形は「見つめる者を中心の一点に吸い込ませるように感じさせるものである。」と述べているが、³ この詩の「渦巻き構造」も読者をローランドとともに渦の中心「暗黒の塔」へと吸い込んでいくような機能を有している。

さて、ここで一言触れて置きたいことがある。上の分析からも明らかなように、この詩の中でローランドがかなり内容の濃い空間的体験をするのに対して、時間の方はほとんど動いていないのである。これは日常的な尺度からは矛盾と映るものであるが、何故このような非日常的状况が展開するのかについて、「チャイルド・ローランド」の創作に関するブラウニング自身のコメントが参考になると思う。ブラウニングがこの詩を書いたのは1852年の年頭でパリに滞在していた時のことであるが、その時のことを後に(1887年)回想して、“‘Childe Roland’ came upon me as a kind of dream. I had to write it, then and there, and I finished it the same day, I believe. But it was simply that I had to do it.”と語っている。⁴ このことは一つの作品を慎重に熟慮を重ねて書き上げるタイプのブラウニングには珍しいことである。これには旅先のパリでは手許に十分な文献がなかったことも影響していると思う。いずれにせよ、「チャイルド・ローランド」は一つの夢として詩人が靈感したものであり所謂‘dream-vision’である。それゆえ必然的にローランドが体験する世界も時間・空間の日常的な法則を離れて、夢の世界の自由さを備えている。そういう意味で、Robert Langbaumが言うように、“the poem follows the structure not of situation but of experience.”なのである。⁵

このような構造の中へローランドは自ら入って行き、多くの試練に耐えて念願の塔に到達したのであるから、彼の冒険は成功したと言えなくもない。だが我々は彼の「成功」を手放しで喜ぶ訳にはいかない。なるほど塔に着くには着いたが、その塔はたかだか“The round squat turret, blind as the fool’s heart, / Built of brown stone, without a counterpart / In the whole world.”(ll. 182-84)であって、世に二つと無いものではあるが生命を賭して求めるほど価値のある物とは思えない。その「愚か者のように暗くて円いずんぐりした小塔」にやって来て彼はいったい何をしようと言うのだろうか。その上、E. Warwick Slinnも述べているように、“There is no glorious celebration of the quester’s success, no bestowing of reward and meaning...”なのである。⁶ 成功に対する報酬が無いばかりか、彼はこの時既に罌に嵌ってしまっており、その場から逃れる道は鎖されているのである。こうした状況を考慮に入れると、ローランドの探求ははたしてほんとうに成功だったのか、という疑問が湧いてくる。

そこでまず、ローランドがどのような心理状態で「暗黒の塔」への探求を続けていたかを明らかにしたいと思う。

この詩の冒頭で、白髪の跛に出会った時、ローランドは既に絶望状況にあった。長年に渡って引き伸ばされた探求に対して彼の希望は消えかけていたのである。

IV

For, what with my whole world-wide wandering,

What with my search drawn out thro’ years, my hope

Dwindled into a ghost not fit to cope
 With that obstreperous joy success would bring,
 I hardly tried now to rebuke the spring
 My heart made, finding failure in its scope. (19-24)

ここでブラウニングは/w/の 'alliteration' を効果的に使いローランドが世界中を隈無く遍歴して来たイメージを音の面からも表現し、また、"my" という代名詞を三度も続けて使うことによって、自意識過剰過ぎみな彼の精神状態をよく描いている。このような状況はケルケゴールの言う「絶望」に似ているのではないかと思う。ケルケゴールの「絶望は死に至る病である」という言葉はあまりにも有名であるが、更に彼はこう説明している。「絶望の苦悩は死ぬことができないというまさにその点に存するのである。絶望は死病にとりつかれている者に似ている。—この者はそこに横たわりつつ死に瀕しているのであるが、死ぬことができないのである。」と。⁷ すなわち、死ぬに死ねない状況を彼は「絶望」と呼んでいるのであるが、ローランドはまさにその意味で「絶望」していた。この状態を彼はいみじくも死に瀕している人の比喩を用いて表現している。

V

As when a sick man very near to death
 Seems dead indeed, and feels begin and end
 The tears and takes the farewell of each friend,
 And hears one bid the other go, draw breath
 Freelier outside, ('since all is o'er,' he saith,
 'And the blow fallen no grieving can amend;')

VI

While some discuss if near the other graves
 Be room enough for this, and when a day
 Suits best for carrying the corpse away,
 With care about the banners, scarves and staves:
 And still the man hears all, and only craves
 He may not shame such tender love and stay. (25-36)

死の床にあって、友人たちが葬式の相談をしている声を聞いた病人が、彼らの面目を潰さないように早く死にたいと望むような心境にローランドは居るのである。ローランドは長引く探求に疲れてしまったのだ。今や彼の願いは「目的地」("the end," 1. 17) に達することよりも、この探求に「何かのけり」("some end," 1. 18) がつくことである。成功よりもむしろ失敗に対して心が弾むといったローランドにとって、成功が持たらずであろう喜びは "obstreperous" (1. 22) なひどく騒々しいものに思えた。今考えられる最善の結果は、彼よりも先に「暗黒の塔」に向けて旅立った騎士たちのように失敗することであり、問題は自分がそれに相応しいか、ということであった。このような絶望状況にあるローランドにとって、彼の探求は自分の自由意志で求めたものというより、むしろ渦巻き状の空間の中に一個の餌食として吸い込まれていく過程と映っているのである。

実際、ローランドがかの跛の言葉を聞いた時、彼の頭裡には跛が偽をついて自分を「もう一人の餌食」にしようとしているという考えが浮かんだのである。

I

My first thought was, he lied in every word,
 That hoary cripple, with malicious eye
 Askance to watch the working of his lie
 On mine, and mouth scarce able to afford
 Suppression of the glee, that pursed and scored
 Its edge, at one more victim gained thereby. (1-6)

だがこうした考えは全て彼の絶望の為せる業であった。なぜなら、跛の教えてくれた地域は“that ominous tract which, all agree, / Hides the Dark Tower.” (ll. 14-15) なのであるから。⁸つまり、跛の言葉は全て真実であり、全ての人が「暗黒の塔」があると同意している方角を指してくれたのである。それにもかかわらず、それを偽と感じた心は絶望から来る強迫観念とも言うべきものだろう。

ともかく、ローランドは跛の言葉を疑っていた。それならば跛の指示を拒否して別の道を取れば良さそうなものだが、彼は「黙認して」(“acquiescingly,” l. 15) 跛の言葉に従ったのである。これも絶望の為せる業であろう。それは後で、“acquiescingly”をローランドが“quiet as despair” (l. 43) と言い換えていることから解る。ちなみに、これとよく似た表現が“mute despair” (l. 118) として出てくるが、ローランドは絶望の属性を静寂と捕えているようである。それならば、結末の二行に至るまで、彼は対外的に全く言葉を発していないのであるから、絶望状態の静けさはこの詩の基調を成しているとも言えるだろう。

いずれにせよ、こうしてローランドは平原の中へと足を踏み入れて行く訳だが、彼の強迫観念は人間に対してだけでなく、中立なはずの自然に対しても向けられていく。彼が跛に対して持った一種の被害者意識を太陽や平原に対しても感じてしまうのである。

All the day
 Had been a dreary one at best, and dim
 Was settling to its close, yet shot one grim
 Red leer to see the plain catch its estray. (45-48)

ここで“estray”とはもちろん平原に迷い込んだローランドのことを指しているのだが、平原が彼を捕えるのを見るために太陽が赤い流し目のような光を投げかけていると感じるのはまさに‘pathetic fallacy’である。だがこれ以降もローランドにとって自然はますます敵対的なものになっていく。(少なくとも彼にはそう感じられた。)

さて、平原に入り込んだローランドが一步か二歩進んで後ろを振り返ると、もはや安全な道は無くなっていった。これは普通の経験ではあり得ないことであるが、「渦巻き構造」の空間を持つ‘dream vision’としてこの詩を見る時、なるほどと頷ける。直線的な空間構造であれば後ろの道はいつまでも存在し、今居る所と連続的に繋がっているのであるが、渦巻き状の空間においては、一步進めば異なる位相の空間に入ってしまう。その上、「チャイルド・ローランド」の空間は彼という餌食を虜にしようとする力が働いている、いわば、蟻地獄の穴なのだ。そこに一度入ったならば決して戻ることの許されない不可逆的空間なのである。それゆえ、彼には進むことしか残されていないのだ。“I might go on; nought else remained to go.” (l. 54) という言葉がどこか諦めの気持ちを含んでいるように感じるのもそのためである。この言葉は確かに、“Prospice”の語り手が死の

恐怖にも怯まず語った, “Yet the strong man must go:” (l. 8) とか, 老年を迎えた Rabbi Ben Ezra の “Then, welcome each rebuff / That turns earth’s smoothness rough, / Each sting that bids nor sit nor stand but go!” (“Rabbi Ben Ezra,” ll. 31–33) という言葉のニュアンスとはかなり違っている。これらの言葉には絶望観とか諦念といったものが微塵も感じられないからである。

さて, もはや前進するしか選択の余地のないローランドが邂逅したものは, “cockle” や “spurge” (l. 58) 以外は何一つ繁茂していない荒地であった。その土地の自然から慰めを得ようなどとは無理な相談である。そこにあるものと言えただけ “penury, inertness, and grimace” (l. 61) だけなのだから。ローランドの耳には自然が駄々をこねてこう言っているのが聞えた。

‘It nothing skills: I cannot help my case:

‘T is the Last Judgment’s fire must cure this place,

‘Calcine its clods and set my prisoners free.’ (64–66)

ここで自然はその中に生えている僅かな植物を “my prisoners” と呼んでいるが, 見方を変えればローランド自身も自然の虜なのである。そしてまた, 薊の伸びた茎の先は何者かに切り取られ, ギシギシの葉には穴や裂け目が開いていて “All hope of greenness” (l. 71) を失なうほど傷つけられていた。これは絶望し憔悴したローランドの心象風景であるとも言えよう。

その後, 彼は “One stiff blind horse” (l. 76) を見かけるが, これまた年老いて悪魔の飼育場からお払い箱になったような痩せ馬であった。ローランドはその馬に同情するどころか, かえって “I never saw a brute I hated so; / He must be wicked to deserve such pain.” (ll. 83–84) と言って嫌悪感を顕にしている。彼は何故その死んだも同然のような馬をそんなにまで憎んだのだろうか。それは, この馬と同じように「生における死」の状態にあり苦悩しているローランドが馬の姿の中に発見した自分自身の姿に対する嫌悪感の故であったと思う。

いずれにせよ, 外界にはローランドに慰めを与えてくれるものは何一つとして無かった。そこで, 彼は過去の楽しかった思い出に希望を見い出そうとする。これは荒涼とした冷たい空間に嫌気がさしたローランドの時間的なものへの逃避と考えられる。もっともローランド自身はまず初めに昔の楽しかったことを考え, しかる後に戦うのが, “the soldier’s art:” (l. 89) であって, “One taste of the old time sets all to rights.” (l. 90) だなどと理屈をこねているが, これは逃避以外の何ものでもないだろう。

こうして, ローランドは Cuthbert と Giles という二人の友人を思い起こしたが, 二人の犯した不名誉な行為の故にローランドの期待は無惨にも裏切られ, 希望の火も消されてしまう。彼らが具体的に何をしたのは解らないが, おそらく騎士に相応しくない不誠実な行動をしたのであろう。ともかく, 過去への逃避は失敗に終わってしまった。この詩の中では空間的なものが強力な力を有して、そこから逃れることはたとえ時間の中にさえできないのである。実際, ローランドは過去の苦い思い出の故に, “Better this present than a past like that;” (l. 103) と言ってなお荒野を進んで行くのである。

するとそこに突然小川が蛇のように現われた。

XIX

A sudden little river crossed my path

As unexpected as a serpent comes.

No sluggish tide congenial to the glooms;

This, as it frothed by, might have been a bath
 For the fiend's glowing hoof — to see the wrath
 Of its black eddy bespate with flakes and spumes. (109—14)

この泡立ち流れる小川はダンテ(Dante)の『神曲』(「地獄篇」第七歌)に出てくるスティージェ(Styx)の沼を連想させる。この沼はダンテが導者ヴェルギリウス(Virgil)とともに「高き塔」に着く前に渡ったものだが、そこに流れ込む川の水は“Darker than any perse”(l. 103)であった。⁹ また沼の中には憤怒者の靈魂が泥まみれになってうごめいているのだが、外に姿を出している者もいれば、全く中に沈んでしまった者もある。ヴェルギリウスはこの後者についてダンテに、“others lie plunged deep in this vile broth, / whose sighs — see there, wherever one may look — / Come bubbling up to the top and make it froth.” (ll. 118—20)と語っている。つまり、水面の泡は彼らの吐くため息が上に登って来たものなのだ。これはローランドの川の黒い渦巻きが激怒のあまり泡を吹きまくっているイメージと酷似している。

このような川を渡る時にローランドが恐れたのは自分の足が死者の顔を踏むのではないかとということであり、また、窪みを捜すために突き刺した槍が死者の髪や口髭に絡まるのではないかとということであった。ここにもまた自分が何かの虜となるのではないかとという恐れが感じられる。それが高じて自分が刺したのはミズネズミだったのか、いや赤ん坊の泣き声のようだったなどと妄想が湧いて来た。こうしてやがて川を渡り終えた。

そして、対岸に着いたローランドであったが、彼を待っていたのはもっと恐ろしい泥の水溜りであった。そこは多くの餌食が不思議な力によって引き込まれ、そこで腕き争い合っている内に土が踏みつけられてできたような場所であった。周りには広大な平原があるのに、どうしてそこだけが水溜りになっているのかローランドには不可解であった。Margaret Willyはこの不思議な力について、“Man's alleged freewill has proved impotent against the stronger compulsion of this place.”と指摘しているが、¹⁰ これはローランド自身にも当てはまる。彼の自由意志よりも強い力が彼を蟻地獄の穴に引き入れて確実に中心点に送っているのである。それゆえ、中心点である「暗黒の塔」が意外に近い所にあったとしても不思議ではない。¹¹

実際、ローランドが荒野の中で“*And just as far as ever from the end!*”(l. 157)と思っていた時、大きな黒い鳥が飛んで来たので、目を上げると何と知らない内に周りの平原が山々に姿を変えていた。山々に阻まれたローランドがもうこれ以上進めないと思い諦めようとした瞬間、罟が閉まるようなカチッという音がして“den”(l. 174)の中に嵌ってしまう。この“den”という語は何か小さなほら穴といったものではなく、山々に囲まれた谷間自体が“den”なのである。その後ろの道が今塞がってしまったのだ。こうして、ローランドはどこにも逃げられない穴の中にまで追いつめられてしまった。だがまさにその穴の真中に「暗黒の塔」があったのである。

しかし、「チャイルド・ローランド」の「渦巻き構造」はまだ終わっていない。今度は周りの山々が巨人のような姿になって追いつめられた獲物であるローランドの息の根を止めようとするのである。更に、彼の死を先取りして弔うかのように探求の途中で倒れた冒険者たちの名前が鐘のように響き渡った。すると、彼らの幻影がローランドの最期を見ようと山腹に並び彼を取り囲んだ。ここに至って、この詩の渦はローランドという“*One more picture*”(l. 201)を囲む“*a living frame*”にまで狭くなり、彼を完全に飲み込んでしまわんばかりである。

以上のような考察から、何故ローランドの探求を単純に成功と言えないのかが明らかとなった。絶望の中で探求を続けるローランドにとって、この探求は自分の自由意志で勇敢に遂行されたというより、何か大いなる不吉な力によって巻き込まれていく過程に思えた。そこには華々しい冒険者

のイメージはなく周りの風景を必要以上に恐れる臆病な犠牲者のイメージが支配的である。

その渦巻きの中心にあるものが「暗黒の塔」であるが、この「暗黒の塔」なるものはいったい何なのか。Anne William や Leslie M. Thompson はこの塔を死の象徴として見ている。¹² だが「暗黒の塔」が死そのものの象徴であるならば、それを見た後なおローランドを刺し殺そうとする巨人のような山々や、その中復に立って彼を取り巻く騎士たちの描写が続き、そちらに関心が移っていくのは何故であろうか。そう考えてみると、「暗黒の塔」が死の象徴だと単純に断定できないことが解る。そこで「暗黒の塔」の役割りを知るために次の比喩が意味するところを探ってみたいと思う。

The tempest's mocking elf

Points to the shipman thus the unseen shelf

He strikes on, only when the timbers start. (184-86)

これはローランドが暗黒の塔を発見したときには既に罌に落ちていた状態を述べているのだが、ここで“the shipman”がローランドを指し、船がぶつかった“the unseen shelf”が「暗黒の塔」であることは一目瞭然であろう。Aidan Day はこの“the unseen shelf”を注して、“hidden sandband or rocks (whose existence is realized only when the ship founders)”と解説しているが、¹³ 確かに「暗黒の塔」は「見えない暗礁」と同じでそこに当ててみるまではどこにあるのか解らないのである。それゆえに“Dark”なのだ。明るい塔であれば遠くからでも見ることはできよう、だが「暗黒の塔」はそうはいかないのだ。罌に落ちるまでそこに塔があることに気づかずぼんやりしていた自分の不甲斐なさをローランドは、“...Dunce, / Fool, to be dozing at the very nonce, / After a life spent training for the sight!” (ll. 178-180) と言って責めているが、それも無理からぬことである。ローランドの掛った罌がその真中に塔がある谷間そのものの穴であってみれば、罌に嵌らずして「暗黒の塔」を発見することはできない。つまり、そこに行き当て体験して“This was the place!” (l. 176) と知るしかないのである。

ならば「見えない暗礁」に「船乗り」を追いやった“The tempest”とは何か。それはローランドを「渦巻き構造」の中に強力に引きずり込み、「暗黒の塔」にまで追いつめた力である。この力こそ死の力である。すなわち、「チャイルド・ローランド」において死は何か具体的な事物によって象徴されているのではなく、挿鉢状の渦巻きの背後にあって、その渦の中にローランドを巻き込む不吉なものとして示唆されている。そして、「暗黒の塔」は死そのものを象徴しているというよりも、暗礁に乗り上げた船の肋材が崩れるように、それにぶつかった者の自己破壊が始まる、所謂‘a point of destruction’である。そう考えると、この詩の「渦巻き構造」が「暗黒の塔」で終らずに、ローランドを刺し殺そうとする巨人や彼の最期を見届けようとする先発の冒険者たちのイメージにまで進展していくことが納得できる。厳然たる死はその先に、つまりこの詩の外に待ち受けているのである。詩の中には死そのものの姿は現われてこないが、現われていないからこそ一層死に対するローランドの恐怖心が増大するのである。

こうしてローランドは死の力によって「渦巻き構造」の中へ吸い込まれ「暗黒の塔」には達したものの、今や死を待つばかりの状態に陥っている。かくてローランドの探求は明らかに失敗に終わったのである。しかし、彼はこのような進退極まった状況にあって、なおも怯むことなく喇叭を吹き鳴らし、“Childe Roland to the Dark Tower came.” (l. 204) と叫んだ。こうすることによって彼は自ら進んで「暗黒の塔」探求に失敗した者の一人として自分の名前を宣告したのである。それは失敗を自ら認める行為であった。だがそのことの故に、逆説的だが彼の魂は絶望から救われたのである。すなわち、ここで彼は初めて外界に喇叭の音と自分の声とを響かせ、それによって今まで

この詩の基調をなしていた絶望の静けさが破られたのである。ローランドは絶望のうちに黙して死ぬ道ではなく、自ら名乗り出て死に直面する道を選んだ。蟻地獄の穴のような「渦巻き構造」に死の餌食として捕えられたローランドがそこから抜け出る道は、それに抗うのではなく大死一番その渦の中に飛び込んでいって積極的に死を受け入れることであった。彼の行為はまさにぎりぎりの状況における自由意志の発露であり、彼の‘identity’の確立であった。その時、見ゆる状況は同じであっても、魂においてはもはや“victim”ではなく独立を獲得できたのである。また、喇叭を吹くという行為そのものが終末時における死者の復活を象徴するものである故に、¹⁴「チャイルド・ローランド」という詩は、ローランドの完全な失敗という結果にもかかわらず、彼の魂の復活という実存的¹⁵かつ終末的希望をもって終るのである。

注

- 1 本稿で引用したブラウニングの全ての詩のテキストとして、Ian Jack ed., *Browning: Poetical Works 1833-1864* (London: Oxford UP, 1970) を使用した。
- 2 Isobel Armstrong, “The Brownings,” *Sphere History of Literature in the English Language*, vol. 6, *The Victorians* (London: Sphere Books, 1969) ed. Arthur Pollard, qtd. in Aidan Day ed., *Robert Browning: Selected Poetry and Prose* (London: Routledge) 206.
- 3 千田稔『うずまきは語る—迷宮への求心性』(東京:福武書店) 10.
- 4 Lilian Whiting, *The Brownings: Their Life and Art* (New York: Haskell House, 1972) 261.
- 5 Robert Langbaum, *The Poetry of Experience: The Dramatic Monologue in Modern Literary Tradition* (New York: Norton, 1963) 193.
- 6 E. Warwick Slinn, *Browning and the Fictions of Identity* (London: Macmillan, 1982) 160.
- 7 キェルケゴール『死に至る病』(東京:岩波書店) 28.
- 8 Harold Bloom, *A Map of Misreading* (New York: Oxford UP, 1975) 108-09参照。
- 9 ダンテからの引用はいずれも、Dante Alighieri, *The Comedy of Dante Alighieri The Florentine: Cantica I Hell <L'Inferno>*, trans. Dorothy L. Sayers (Harmondsworth: Penguin Books, 1949) 113から。また、Ruth Elizabeth Sullivan, “Browning’s ‘Childe Roland’ and Dante’s ‘Inferno,’” *Victorian Poetry*, 5 (1967): 296-302; Donald Thomas, *Robert Browning: A life within life* (London: Weidenfeld, 1982) 172参照。
- 10 Margaret Willy, *A Critical Commentary on Browning’s ‘Men and Women’* (London: Macmillan, 1968) 59.
- 11 Sutherland Orr, *A Handbook to the Works of Robert Browning* (London: Bell and Sons, 1923) 273参照。ここで彼女は“The Tower is much nearer and more accessible than Childe Roland has thought...” ということがこの詩の“discrepancies”の一つであると指摘している。
- 12 Anne William, “Browning’s ‘Childe Rolando,’ Apprentice for Night,” *Victorian Poetry*, 21 (1983): 31; Leslie M. Thomson, “Biblical Influence in ‘Childe Rolando to the Dark Tower Came,’” *Papers on Language and Literature*, 3 (1967): 343-51参照。
- 13 Aidan Day ed., 208.
- 14 Ad de Vries, *Dictionary of Symbols and Imagery*, revised ed. (Amsterdam: North-Holland, 1976) 258; マンフレート・ルルカー『聖書象徴事典』(京都:人文書院) 250; また新約聖書の Matt. 24:31, 1 Cor. 15:52, 1 Thess. 4:16等参照。
- 15 Robert Langbaum, 194参照。ここで彼は“The triumph in the end I would call existential rather than moral.”と述べてローランドの成功が実存的であると指摘している。

(平成4年9月29日受理)

(平成4年12月28日発行)

